

①

「おにのはなし」

脚本・絵 片山栄子

むかしむかし。

とおいとおい山のむこうに

さんかく峠があつたとさ。

そう、峠のあたまが、

さんかくぼうしだったから、

こんな名前がついたんじや。

(抜きながら)

そして、こっちの山じや。

②

このあるある山には

いっぴきの赤おにが住んでいた。

よう肥えたおにで

あたまのツノも立派やった。

③

というのな。

あるある山は、なんでもようある山でな。

おひさんはよう照るし、雨もようふる。

作物もいっぱい実る。

赤おには食べるものに

なんも不自由せんかった。

それでな。

なんでもひとくちかじっては

もういらんて、ポイツ。

好きに暮らしていたんだ。

④

あるある山の向こうに見えるのが、

ないない山じゃ。

この山に、一匹の青おにが

住んでいた。

やせてひよろーつとしたおにでな。

あたまのツノは一本やった。

⑤

というもな。

青おにの住む「ないない山」は

なあんにもない山でな。

おひさんもあんまりあたらんし、雨も少ない。

いつも、水には苦勞していた。

そうそう、今年は柿も三つしかならんかった。

青おには、それでもありがたいなあと言って、

ひとつは大切に食べ、ひとつは干し、ひとつは鳥たちに

ごちそうした。

雨水をためて、おひさんが少しあたたった日には

お風呂にしたもんだ。

⑥

よく晴れたある日のことだ。

さんかく峠で赤おにと青おにが出会ったんじや。

「おっ、青、元気か。」

「ええ、赤おにさんもお元気そうだなにより。」

そうそう、秋の干し柿、ちょうどおいしいころです。

半分こしましょう。」

「えっ 柿？ 半分って？」

ケツ

ほんとに おまえはないない山のおにだな。

ちよっと おれの山をみてみる。

おどろくなよ。」

⑦

さて、むりやりつれてこられた

あるある山で、青おにがみたものは……。

赤おにがあばれまわるけしき。

青おには 泣きそうになりました。

大切な水。

大切なたべもの。

大切ななにかもが……。

なんてこと。

「赤おにさん いけません

もつたいない もつたいない。

あるある山を 大切にしなければいけませんよ。」

「なに？ おれのあるある山だぞ。

どうしようとおれのかつてだ。

おれのあるある山は

ずっとあるある山なんだ。

うるさい。けちなやつ。

かえれよ。ないない山に。

とつととかえれく。」

⑨

そして、冬がきました。

ながい　ながい　冬。

やがて、春が・・・。

しかし、この年。

あるある山にいくらまっても

春は　きませんでした。

赤おには さむくてたまりません。

おなかもぺこぺこです。

「あゝ こんなとき 干し柿のひとつでもあれば。

あつ 干し柿・・・

青おにが半分こって・・・

きつと 食ったよなあ・・・

あんなに怒ったし・・・

食ったよなあ・・・

もうないよなあ・・・でも・・・」

赤おにはさんかく峠のポストにおてがみを入れました。

「青おにくん ごめんね。わるかった。あやまりたいんだ。」

青おにから返事がきました。

「おいでください。」

やっぱり きみと食べた方がおいしいから

とつてあるよ」と。

ないない山についた 赤おに。

青おには、半分こして、大きい方をくれたのです。

「うまいっ。」

思わず 赤おには 自分の山が

ないない山になってしまったことを

話しました。

青おには、答えました。

「君からみれば ぼくのなない山は、
なあんにもない山にみえるだろうね。

でも、ぼくひとり 生きていくのに

じゅうぶん あるある山なんだよ」と。

そして、雨水をためておくこと。

食べものは 干してのこしておくこと

他の生きものもいっしょに生きること。

今 あるものを大切に 大切にすること。

山を歩きながら話してくれたのです。

赤おには ぐっすり眠りました。

そして、翌朝。

帰ろう。ぼくの山 あるある山に。

青おには、大切な食べものを持たせてくれました。

「こんなに？」と赤おに。

「いいんだよ。困ったらいつでも

来てください。まってるよ」と。

こうして、赤おには、心もからだもあつたまつて

自分の山 あるある山に

帰っていきました。